

民家の保存活用における外国人の役割：滋賀県日野町の事例研究

鈴木あるの

The Role of Foreigners in Preservation and Utilization of Folk Houses : Case Study in Hino, Shiga Prefecture

Arno SUZUKI

1. 用語の定義

「外国人」とは主に外国籍の人々を指す言葉であるが、本稿では、外国籍であっても日本で生まれ日本文化を基盤として育ち日本語を母語としている人々を含めていない。また日本文学研究者の故ドナルド・キーン博士のように、多くの日本人よりも日本文化に詳しい上に日本国籍まで取得しているような人でも、異文化の視点を備えていること、そしてその姓名と外見が周囲に与える印象を考慮し、ここでは便宜上の「外国人」として取り扱うこととする。

2. 問題の背景

生活様式の近代化と人々の意識の変化にともない、価値ある民家やそこでの生活など、日本の伝統的文化が急速に失われていることは論を待たない。また伝統文化の保存維持は経済的負担が大きいため、後継者不足も深刻さを増している⁽¹⁾。

そのような中、外国人が日本の伝統文化に価値を見出し、その継承や維持・保存・啓蒙に力を尽くしている例も多く、本学会においても外国人の役員達が貢献をしている。伝統技能の世界においては、厳しい修業に飛び込む日本の若者が減る中、後継者を外国人に頼ることが増えた。芸道を極め、指導員として国際化に貢献している人々もいる。実務として伝統工芸美術の修復を手がけ、文化庁や国土交通省など数々の省庁でアドバイザーも務める外国人もいる。本論では、民家の解体阻止に貢献している外国人の事例を紹介し、その役割を考察する。

3. 日野町の概要

滋賀県蒲生郡日野町は、琵琶湖の東側の東近江市と甲賀市に挟まれた面積 117.6 km²の町である（図1）。近江鉄道日野駅から東へ2kmほどの中心市街地は、「日野商人街道」に沿って東西2km程に広がる（図2）。

人口は過去 1990 年頃から約 22,000 人前後では安定している。外国人登録者は約 2%の 400 人程度で、国籍は多い順にブラジル、中国、韓国・朝鮮、ペルー、フィリピンであり、大半は近隣の製造業での就労者および在日外国人と思われる。町内人口のうち、就業者は総人口の半数程度の約 11,000 名、通学者は 900 名弱で、そのうち町内での就業・就学と近隣市町村へ通勤通学は半々である⁽²⁾。

平成の大合併時にも町として生き残った。

「自律の気概あふれるまちづくり」を掲げ、積極的な住民参加を促し支援する町政により、官民が連携して地域おこしを行っている。



図1 日野町の位置



図2 日野町中心市街 (Google map より筆者作成)

4. 日野町の歴史と文化

日野町における住民参加の慣習は、この町の自律の歴史に由来すると考えられる。この地は古くから蒲生家が治めていたが、16世紀初頭に中野城が築かれてからは城下町として形成された。1584年、武功の褒賞により蒲生氏郷が伊勢松ヶ島へ移封すると、日野は領主を失い城下町は荒廃した。これを心配した秀吉は、町民に対して使役の免除や蒲生家の新領地への移住許可といった特別措置を与えた。そのため十数年間は領主を慕う町民の大量流出があり町はさらに衰退した。伊勢や会津若松といった蒲生家の領地に「日野町」「樋之町」といった地名が見られるのはこのためである。しかし荒廃した旧城郭内に新町が建設され、租税の優遇を伴う新規転入の呼びかけが行われると、再び人口が増え、鉄砲や日野腕といった商工業も復活した。また東国に至るまで蒲生家の新領地への行き来が自由にできるという特権を活かし、行商によって大成功をおさめる町民が現れ、近江日野商人は近世を通じて隆盛をみた。日野町民は、後に中央から次々とやってくる新領主や代官等に対しても秀吉の時代の使役免除令を対抗し、自由な商業活動でさらなる富を蓄えることができた。

近江日野の商法は、日野に本宅すなわち本社機能を残したまま、出店を全国に次々と増やしていくところに特徴がある。出店すなわち支店は、中国、北陸、関東、東北、九州まで、全国的に広まった。店主も奉公人も出店に単身赴任する習慣から、通常は妻子のみが本宅を守っていたため、安全への配慮からか、前面を塀で囲む閉鎖的な造りとなっている。

日野商人の本宅は、外から見えないところに贅を尽くした普請をしたことから、「八幡表、日野裏」と呼ばれた。建物が高品質で長もちする上、古くから日野小学校に「郷土室」を設けて地域の歴史と文化を重んじる教育をしてきたため、町民の意識も高く、戦後も美しい伝統建築の街並みを残していた⁽³⁾。

5. 日野町における文化財の保存活用状況

現在日野町の木造住宅は約9000棟存在しており、その他に土蔵約1,200棟、付属屋も約9,000棟もあると登録されているが、空き家化と解体は毎日進んでおり、現状での正確な数はつかめていない⁽⁴⁾。

固定資産税台帳の記録によると、昭和25年以前に建築された専用住宅のうち所有者の異なる物件は1757件ある⁽⁵⁾。1972年のまちなみ調査においては日野商人本宅の建築が多く残っていたが、1993年の調査時にはその多数が失われていたことが荻谷らの先行研究⁽³⁾により明らかにされているが、その後も解体や空き家化が進んだことは間違いない。

文化財住宅としては、国登録文化財は旧山中兵右衛門邸6棟（1998年1月登録、昭和）、旧正野玄三薬店2棟（1999年11月登録、昭和・大正）、岡家住宅主屋1棟（2017年11月登録、昭和、ヴォーリズ設計の和洋折衷）、町指定文化財は旧山中正吉家住宅15棟（2015年3月登録、江戸時代）がある。個人所有は岡家住宅のみで、他は全て町の所有である⁽⁶⁾。

旧山中兵右衛門邸は「近江日野商人館」として日野商人本宅の生活様式を見せている。旧正野薬店は「日野まちかど感応館」として、薬店としての町家のしつらえを残しつつ、ギャラリー、喫茶コーナーおよび観光協会事務所として機能しており、道路を挟んだ駐車場の一角に新築された新館とともに、町の観光拠点となっている。旧山中正吉家は町の古美術商が買い取りギャラリーとして使用していたが、その後町の所有となり、補助金を活用して建物を修理し、2015年より「日野ふるさと館」として一般公開し、大広間では食体験レストランが予約制および月一回の一般公開の形で営業されている。当事業については当初は町内の民間企業への委託を検討したが応募が無く、かねてから活発に活動していた町内在住の主婦20名からなる「伝統料理を継承する会」が、町から施設使用許可を得て営業している⁽⁷⁾。

6. 日野まちなみ保全会の歩み

日野商人本宅を始めとする貴重な民家のこれ以上の解体を防ぐべく、画期的な取り組みをしているのが、日野まちなみ保全会である。当初は町役場の管轄で1999年に「日野のまちなみと景観を考える会」として設立されたが、2008年に町から独立して民間組織となり、同時に「日野まちなみ保全会」と改称した。公的補助金に依存せず、寄付などによる独自の予算をもって、ボランティア会員達が、町役場の職員とも密接に連携をとりつつ運営している。

保全会が主導した板塀の弁柄の塗り直しは、当初5軒から始まりその後25軒まで広がった。保全会が直接管理する旧西田礼三郎(図3)では、日野商家の特色である棧敷窓のある板塀の傷みが酷かったが、2017年にこの板塀を修復するためのクラウドファンディングを行い、62人の協力者と1,024,000円の資金集めに成功した。旧西田邸では落語寄席を毎年開催し、毎回約70名の聴衆を動員している。

現在まちなみ保全会の事務局として利用されている街道沿いの2棟の古民家(図4)も、保全会会員である不動産業者が解体寸前に自ら買い取り、自費で改修し無償で保全会に貸出しているものである。別の解体直前だった駅近くに立地する大規模民家も、その業者が海外から買い手を見つけ、メキシコ料理を提供する店舗として再生される目処をつけた。旧山中正吉家の再生や近江鉄道日野駅の駅舎の解体阻止と再生も、保存会会員達が陰で支えた。

こうした保全会のたゆまぬ努力の結果、古民家の利用を前提とした町外からの移住者も増え、貴重な民家の解体阻止に着実に効果を上げている。



図3 西田礼三郎



図4 保全会事務局

7. 米国人モーア氏による民家の再生

日野まちなみ保全会事務局長モーア・オースティン氏は、日野の古民家移住の先駆者的存在である。氏は米国マサチューセッツ州ボストン郊外の出身で、地元の歴史学会会長であった父親とともに幼少期より歴史的建造物の保全に関わってきた。エドワード・S・モース博士とも親交があった家に育ったことから日本文化に興味をもち、大学で日本語を学んだ。

卒業後の1984年に文部科学省のフェローとして来日し、以来35年間ずっと日本の公的機関で働いている。1980年代には旧自治省の国際化推進団体の立ち上げに参画し、1991年からそのうちのひとつに勤務するため、滋賀県に移住した。最初は琵琶湖西岸の古民家を12年間借家したが、建替えのため退出を余儀なくされた。モーア氏からの家賃収入を得た家主が新築を決めたという皮肉であった。

転居先を探していたモーア氏は、2004年に現在の住居である旧岡喜三郎邸(図5)を紹介され、「一目惚れ」で即購入した⁽⁷⁾。この家は13年間空き家で、前所有者の家財道具を残したまま売却に出されていたのだが、モーア氏は手配済みであった不要品回収業者を断り、家具から前所有者の小さな所持品まで、「家に馴染んでいるもの」を選別して残し、今でも使用している(図6)。

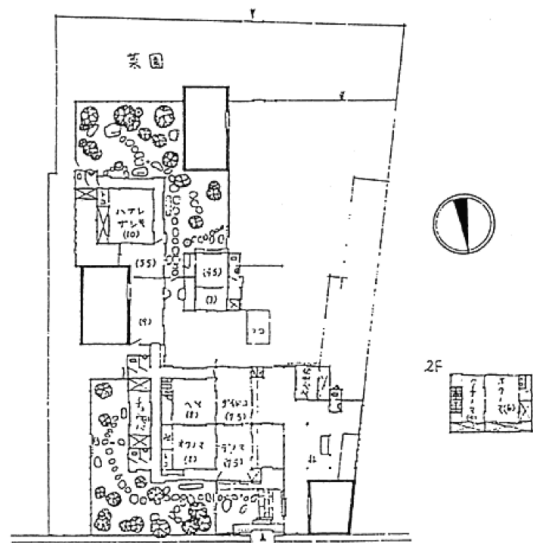


図5 旧・岡喜三郎邸平面図(苅谷1993)

入居前の修繕にあたっては、屋根瓦の葺き替え、配管工事、電気工事、伝統技法の木工工事と左官工事および畳の張り替えは本職に依頼した。しかし障子の張り替え、板塀の弁柄の塗り替え、庭木の手入れ等の日常的維持管理や細かな修理は、すべてモーア氏が自らの手で行っている（図7）。庭はかなりの面積のある凝った作庭であるが、3mを超えるような高木の剪定のみ本職に依頼し、他は全てモーア氏が草取りや剪定を行う。庭の一角にはアメリカの家庭の「ガレージ」を思い出させる道具部屋があった。

木工工事については和釘を用いた伝統技法を使える職人を求め、既に引退していた当時 78 歳の大工を町内から探し出した。使う機会の無くなっていた伝統技法の依頼に、大工もたいそう喜んだそうである。弟子や他の業者が現代の工具を使おうとすることを、モーア氏とその大工は許さなかった。しかし水回りだけは近代的な設備を導入した（図8）。こうして家の購入費用を上回る修繕費用をかけ⁽⁸⁾、明治35年築の旧岡喜三郎邸は美しく蘇り、モーア家の日常生活の場として活用されている⁽⁹⁾（図9）。

転入後は「日野のまちなみと景観を考える会」に参加し、2008年に請われて事務局長となった。これ以外にも町代など地域の役職を多数歴任し^(註1)、「ノーと言えないアメリカ人です」と自嘲する^(註2)。

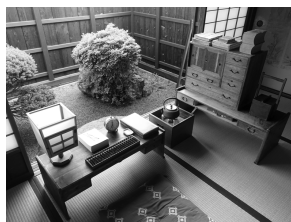


図6 帳場（筆者近影）

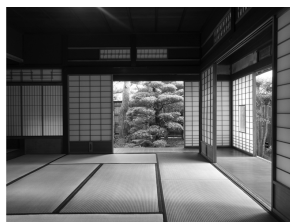


図7 離れ座敷と庭（筆者近影）

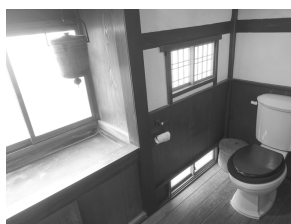


図8 現代的水回り（筆者近影）



図9 家族（モーア氏提供）

8. 不動産業者らによる古民家保存活用の努力

モーア氏に旧岡喜三郎邸を仲介した不動産業者は、京都市に本社をもつ内山産業株式会社⁽¹⁰⁾である。

社長の内山佳之氏は、人柄や生活ぶりの信頼できる顧客にしか古民家物件を仲介しない。田舎では地域コミュニティを大切にしているため、それを理解できる買主でなければ、後々問題を起こしかねず、もしそうなったら仲介業者としての内山氏の信用に係わるからである。内山氏にとってモーア氏は初めての外国人顧客であったが、その人柄を信用したので、文化財的価値の高い旧岡喜三郎邸を紹介した。

買い手が外国人であるという特殊事情から近隣に配慮し、内覧にも通常より多くの段階を踏み、契約し購入された後も、一日も早く入居したかったモーア氏を待たせてまで、内山氏自らが近隣への挨拶回りを丹念に行った。その甲斐もあってか、モーア氏はコミュニティに歓迎されることとなった^(註3)。

内山氏はもともと日野町とは縁が無く、これが初めての仲介であったが、その後も日野まちなみ保全会の会員となり、古民家の解体阻止に大きな貢献をしている。現在事務局となっている二棟の建物を自費で買い取り修理して無償で貸し出している件についても、直接の利益は無いが、日野で商売ができることへの恩返し、そして今後のご縁に繋がりたいという気持ちでやっているそうである^(註3)。

近江商人にはもともと「三方よし」といって売手・買手・社会の三者を利するべしという伝統があるが、特に文化度が高いことで知られる日野商人にとっては、私財を投げ打って文化財の保存活用に尽力することは、決して珍しいことではないようである。古美術商「かく福」の経営者である藤原氏によれば、「古民家の保存活用は伝染する病気」だそうで、商人達にとってすら、損得勘定でできるものではないようである^(註4)。藤原氏は保全会の会員ではないが、今年、空いた古民家の買手を募集し、愛知県から手打ち蕎麦店を誘致することにも成功した。

9. 考察：外国人の果たしている役割

内山氏や藤原氏の社会奉仕的な活動は、日野の伝統とモーア氏からの影響が相互作用した結果であると筆者は見ている。美しい本宅の街並みを築いた日野商人も、戦後は社会構造の変化により廃業が相次ぎ、また単身赴任の伝統も失われ、本宅だけで実業の無かった町内からは若者が流出し、町民の高齢化が進んでいた。1993年の聞き取り調査⁽³⁾においては、岡喜三郎邸も老夫婦のみの居住となっており、「この広い家のそうじや庭木の手入れも思うにまかせぬ。家の修理も大きな負担」といった状況であった。しかし米国育ちで大きな家や古い建物の維持管理に慣れているモーア氏は、それらを自分で行うことができるし、出費についても納得している。文化財を大切にする、それを行政の金銭的支援に頼らず自力で行うことは、米国人にとっては常識である。それが日野の伝統を思い出させ、蘇らせた。

モーア氏の発想力や迅速な行動力は特筆に値すべきであるが、それを支える外国人コミュニティの存在も大きい。文化財に寄付をするという行為は欧米ではごく一般的に行われていることだが、西田邸のクラウドファンディングにおいても、モーア氏の友人である外国人からの支援が多く見られた。

地方の小さな町で外国人が主体となって活動していることは、話題性がありメディアに掲載されやすいことから、広報の効果として、まちなみ保全活動を間接的に助ける役割を果たしていると思われる。

日野町にはその後も、外国人を含め新たな移住者が続いている。モーア氏の転入時には小字内 20 軒中 4 軒が住めない状態で外 2 軒がほぼ空き家であったが、現在は全てが修復され居住されている。最近では英国人トム・ヴィンセント氏が同じく内山氏の仲介で日野に古民家を購入して移住し、地元の酒造業者らと地ビール製造会社を立ち上げ、日野ブルーイングとして全国に商品を出荷するに至っている。

日野町は活気を取り戻しているのである。

参考文献および出典

- (1) 鈴木あるの、重要文化財の保存活用における課題：奈良町藤岡家住宅の事例を中心に、民俗建築 第 142 号 2012.6
- (2) 日野町役場住民課 公表資料
- (3) 荻谷勇雅、都市景観の形成と保全に関する研究、京都大学工学研究科学学位論文 5-76pp. 1993
- (4) 日野町役場税務課 公表資料
- (5) 日野町役場企画調整課に問い合わせ 2019.6
- (6) 日野町役場教育委員会生涯学習課 公表資料
- (7) 近江日野ふるさと館に問い合わせ 2019.6
- (8) 秋川ゆか、かつての職人、いまの職人と対話しながら、ていねいに直し続ける「近江商人の館」コンフォルト 建築資料研究社 2007.6
- (9) Yuka Hayashi, A Home Suitable for a Samurai, Wall Street Journal, 2013.11
- (10) 内山産業株式会社ウェブサイト「田舎暮らし」
<http://www.inaka-life.co.jp/>

文末注

注1)

モーア氏の地域における役職 (2019年9月現在)

- ・ 日野まちなみ保全会事務局長
- ・ 日野町国際親善協会副会長
- ・ 滋賀県警東近江署日野警部交番連絡員
- ・ 日野町大窪一区日野公民館企画員
- ・ 日野駅再生プロジェクト委員
- ・ 日野町棧敷窓アート企画員
- ・ 日野ひなまつり紀行企画委員

モーア氏が歴任した地域の役職 (記憶しているもの)

- ・ 日野町大字大窪字清水町町代
- ・ 日野町大字大窪字清水町副町代
- ・ 日野町大窪一区日野公民館文化委員
- ・ 日野町ハートフルひの人権委員会常任理事
- ・ 日野町大窪一区人権委員

注2) モーア氏への聞き取り調査は、2019年5月19日、日野町のモーア邸および近隣の文化施設において行った。

注3) 内山氏への聞き取りは、2019年5月15日、内山産業株式会社本社(京都市)にて行った。

注4) 藤原氏からの説明は、2019年5月19日、日野町の古美術かく福本店における雑談から採用した。